留学生への支援から絆を深める（『中外日報』一月十二日付）

ことし九十二歳になる長野市篠ノ井の曹洞宗円福寺東堂藤本幸邦氏は、十数年来、アジアからの留学生に図書を送る運動を続けている。信州大学や新潟大学の留学生に毎年、一人一万円相当の希望図書を贈り、また信州大学の図書館に留学生のための特別コーナーを設けて「友愛の図書」と名づけ、年間五十万円を寄付してゼミの教授に選定を依頼し、留学生に必要な図書を購入している。

活動を支えているのは「信州・新潟の留学生に本を贈る会」での募金。協力者は一年一万円の会費を同会あてに振替で送金するしくみである。平成十三年度の実績は信州大学その他で二百八十五人、新潟大学で八十人に贈呈した。この数字からも、アジア各国から日本への留学生の多さがわかる。

希望図書を申し出る際の条件は一つ。「留学生から日本のみなさんへ」と題する短い作文を添付することで、中国や韓国、インド、スリランカ、モンゴル、チベット、ネパール、インドネシアなど、アジア各国からの留学生が、文化も歴史も異なる日本へきて感じたこと、考えたことなどを自由につづっている。

寄せられた作文の一つ一つに藤本氏はコメントをつけ、それを『留学生の想い』と題して本にまとめ、出版している。昨年で第十三集を重ねた。留学生と一方通行の関係ではなく、心の交流を願ってのこと。厳しい条件を乗り越えて

留学した秀才だけに、鋭い比較文化論や文明批判を含んだものもあり、アジアにおける日本の位置、役割、文化的特色について考えさせられることが多い。

たとえば韓国人留学生の目には「日本のテレビは非常に扇情的」と映り、マレーシアからの留学生は「謝り好きな日本人」の行動を「美しい心作りの源」と受けとめ、「大切にしていきたい」という。中国人の留学生は「日本には平和を愛する世界人民と一緒に、いつまでも世界平和を擁護するために努力してもらいたい」と期待を寄せ、他の一人は「歴史教科書には将来の世代のために、その国の達成したことと、過ちと両方が書かれねばならない」と指摘する。

「戦争で人類を支配することはできません。愛が平和を創造するのです。個人の権利は個人では守れません。人類の連帯によって守られるのです」と叫ぶ藤本氏は、まずアジアの連帯を実現したいと願う。

同じ曹洞宗の横浜・善光寺住職黒田武志氏は、十八年前に「横浜善光寺留学僧育英会」を設立し、日本で仏教を学ぶ留学生や世界へ旅立つ日本人留学生への支援を続けている。

留学生たちは帰国後、それぞれの国の発展を担う人材として活躍している。日本での留学体験は人生の上で大きな意味を持っているにちがいない。すなわち地道でも藤本氏や黒田氏の活動が、日本とアジアその他の国との相互理解と交流の絆を深めるものであることは確かであろう。

そう考えれば「アジア連帯」の構想は決して遠い夢のような話ではない。目指すべき理想は、それを手の届くところへ引き寄せる努力と実践、それを支える強い信念によって実現することを証明している。